世界のために “考え・行動し・広げる” 教育を

私たちが暮らす世界にはさまざまな課題があるが、それらはどこか遠い国の話ばかりではない。
今、日本の教育現場では、世界に目を向けて身近なことから主体的に行動する力や、
多様性を認める心を育む教育の重要性が高まっている。
JICAが開発した映像教材を使って、その実践に取り組んだ4人の先生のユニークな授業を紹介しよう。

授業で使える10分映像集を開発！

2015年に国連が採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」や、今般の学習指導要領の改訂などに伴い、世界の課題や異文化への理解を促す教育がより一層求められるようになった。「国際理解教育」や「開発教育」と呼ばれるこうした教育に注目が集まる一方、準備の大変さや認知度の低さが普及のハードルだ。そこで、JICAが開発したのが、授業に取り入れやすい「10分映像集」。あえて特定のメッセージを持たせず、子どもたち自身の答えを引き出すことの出来る内容が特長だ。「難民」「イスラム」「国際協力・ODA」「教育」の4つのテーマで制作された本教材は、ホームページから閲覧でき、希望者にDVDを提供している。これらを活用し、子どもたちと世界をつなぐ授業の実践に役立ててみてはいかがだろうか。

4つのテーマを扱った映像教材

難民

東京都 新島村立式根島中学校 **髙田 裕行** 先生

私は、難民を取り巻く問題を通して、地域の問題解決に向けて考え、行動する力を育むことを狙いに、中学3年生の社会科で全7時間の授業を行いました。授業の導入として取り上げたのは、東日本大震災後に福島県で原子力発電所の近隣住民が経験した強制避難の事例です。生徒たちは、避難先の地区に以前から暮らしている住民と避難住民との対立の原因を考えました。その上で視線を世界に移し、これと似た事例として難民問題を紹介。映像教材でシリア難民や彼らの受け入れをめぐって葛藤する国々の実態を視聴した後、資料をもとに難民、移民、国内避難民の定義も学びました。

授業では、国際NGOの「難民を助ける会」の協力の下、“ワタシが難民になったら”というシミュレーションも行っています。保護者にも協力してもらい、各家庭が隣国に避難する立場になって、持っていく物や将来日本に戻るかどうかなどを家族で話し合いました。その他にも、震災によって隣の島から地元に大勢の人々が避難してきた場合の利点と問題点を議論させるなど、“自分事”として考えてもらうことを意識しました。

授業の終盤は、自分たちに何ができるのかを考える時間です。生徒たちが提案したのは、日本に暮らす難民の方々を支援するための募金活動。集まったお金の使い道も自分たちで考え、現金と合わせて、非常食やマスクなどを認定NPO法人の「難民支援協会」に寄付しました。授業の後、生徒たちは「初めは、なぜ難民について勉強するのだろうと思ったけれど、戦争や差別、飢餓の影響を受けているのが難民だと分かった」「日本に生まれたことを感謝するだけではだめ。一生懸命勉強して立派な大人になり、難民や困っている人の力になりたい」などと話していました。

この映像教材の利点は、10分と短くかつ分かりやすいので、手軽に授業に取り入れられること。日本への期待にも触れられており、生徒の学習意欲を効果的に高めることができました。

シミュレーションを通じて、家族と一緒に難民の気持ちを体験した

ここに注目！

- **日本の事例から当事者意識を醸成し、共感を通じて難民への理解促進**
- **今できることを考え、実践することで社会参加の経験につなげる**

教育

静岡県田方郡 函南町立東小学校 **矢野 淳一** 先生

私は、教育というテーマを小学2年生の生活科と結び付けて授業を行いました。自分とアフリカに住む子どもたちの生活を比べる中で、児童に誰もが自分と同じように成長しようとしていることに気付き、現地の子どもたちが学校へ行けないわけや何のために学ぶのかを考えられるようになってほしいと思ったからです。

私が用意したのは、リンゴやオレンジなどの風味がする水です。見た目は同じ数本のペットボトルに、ドイツ語で書いたラベルを貼り、児童に文字が読めない体験をしてもらいました。「何が入っているか分からなくてこわい」と、文字が読めない不安を話す彼らに、読み書きができなくて困ることを挙げてもらうと、「自分の名前を書けないし、友達に手紙で気持ちを伝えられない」「商品を見ても中身が分からない」など、さまざまな意見が出ました。この後、児童と一緒に西アフリカの教育課題や同地域でJICAが実施している教育改善のプロジェクトの映像を鑑賞しました。「学校に行けるって本当に幸せなんだな」。多くの児童が学ぶことの意味をしっかりと感じ取ってくれました。

文字が読めない体験から学校の大切さを学ぶ子どもたち

ここに注目！

- **実生活に結び付いた体験**を与えることで、低学年の児童にもしっかり考えさせる
- **発達段階に合った国際理解教育**を展開

国際協力・ODA

京都府 京都市立百々（どど）小学校 **松本 清代** 先生

6年生の総合の時間に、世界と日本のつながりや平和な社会の実現について考える授業を行いました。初めに、私がJICA教師海外研修でブラジルを訪れた際に撮影した写真を紹介。日本の名字を持つ女性や、「整頓」という日本語の貼り紙がある現地の交番などを見た児童たちは、「お互いのことをよく知ったら、もっと仲良くなれるかもしれない」と興味津々。続いて、東日本大震災後に日本が各国から受けた支援を取り上げ、支援内容を分類したり、なぜ開発途上国までもが支援してくれたのか考えたりしました。

10分映像集は必要な部分を組み合わせて視聴しました。アフガニスタンで稲作支援を行う日本人専門家の活動や、日本が戦後や震災後に各国から支援を受けた様子を見て、国際協力の意味や世界とのつながりを実感。それから、世界をより良くするために何ができるかを問う映像を見た後には、自分たちで百々小学校版SDGsも作りました。他にも、JICAの出前講座やNGOと連携で折鶴をウクライナに届ける活動も行いました。児童たちからは、「考えるときは地球全体のことを、行動するときは身近なことから始めたいです」「開発途上国は子どもが学校に通えず、安心して飲める水がない国だと思っていたけれど、学習してから、すごく努力している国だと思うようになりました」という声が挙がりました。

自分たちで作った百々小学校版SDGsの目標を掲げる児童たち

ここに注目！

- **多様な事例**を用意して、世界とのつながりを自然と感じ取れる工夫をこらしている
- 自分たちのSDGsを作り、**問題解決に向けて行動し、その活動を周囲に広げる力を養う**

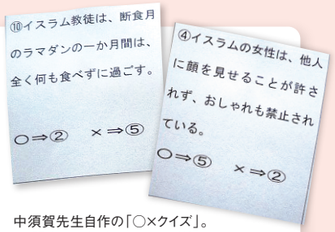
イスラム

広島県立安西高等学校 **中須賀 裕幸** 先生

高校2年生の地理の「イスラムとムスリムの生活」の単元で授業を行いました。まず、イスラム教について知っていることや疑問を書き出してもらうと、「テロを起こして恐ろしい」という、ごく一部のイスラム過激派と混同している意見や、「生活の制限が多くてかわいそう」といった戒律に対する偏見も出てきました。

そこで、正しい知識を学ぶための「○×クイズ」を作り、二人一組で取り組んでもらいました。クイズの試作段階では、開発教育を推進する地元の教育団体で試行し、そこで得た意見を踏まえて改良も加えました。例えば、クイズの問題は「食べたり飲んだりしてはいけないものがある」などの宗教上の原理・原則を問うにとどめ、そこで伝えきれないイスラム世界の多様性は解説スライドで補うなどの工夫です。

その後、日本に暮らすイスラム教徒や各国でのイスラム排斥運動の映像を見た生徒たちは、「間違った認識がいじめにつながっている」など、自分たちの身近な問題と重ねながら理解を深めていたようでした。今後は日本在住のイスラム教徒の方と生徒たちが交流できる機会もつくっていけたらと思っています。



中須賀先生自作の「○×クイズ」。12問全て正解するとカードが輪になる

ここに注目！

- **ネットワーク**を活用して教材を練ることで、授業の効果を高めている
- 先入観なしに**自分と異なる在り方を認める多文化共生の心**を育む